（＊はリポジトリ非登録箇所を示しています）

第10回経験交流会

ネイティブ教員による「母国での教養教育経験をふまえた教養教育への提言」

2009年10月28日（水）14：30～16：30

中京大学名古屋学舎大会議室

安村（司会，国際教養学部）：

皆さん、こんにちは。

それでは、始めたいと思います。

国際教養学部は、旧教養部時代からここ10年ぐらい毎年「経験交流会」と題して、教員が自分の授業の様子などを披露し、質疑応答を通して少しでもよい授業ができるようにしようという催しを実施してまいりました。これは全学にオープンにして聞いていただくとともに、ここ数年他学部の先生にも話していただくようにしてきました。さらに、昨年からは名古屋大学、南山大学、名城大学と中京大学が組んでおります「FD・SDコンソーシアム名古屋」の後援事業として、３大学の先生方にも「お時間があったら来てください」という形で呼び掛けております。

国際教養学部は、フランス、ドイツ、スペイン、ロシア、中国、英語等の専門教育に当たると同時に、全学の教養教育も行っていくわけですけれども、今日、大学のあり方の議論の中で、「リベラル・アーツ」というものも一つの重要な論点になってきております。

そこで、今回は欧米諸国のネイティブの先生方に、それぞれの母国でお受けになった教養教育についてお話ししていただくことを通して、その母国のリベラル・アーツ、あるいはGeneral Education の様子について知り、参考にしようということにいたしました。また、本学で一部担当されている教養教育の体験も併せてご意見をうかがいたいと思います。

最初にお話をお願いしたときに、引き受けてくださるだろうかと少々案じましたけれども、皆さん快くお引き受けくださいまして、私自身も非常に楽しみにしております。

そして、お話を全部お聞きした後に質疑応答、それから意見交換の時間を持つことにして、早速始めてまいりたいと思います。５人の方が話してくださいますので、時間的に１人だいたい15分ということになります。全部続けて聞きますと疲れますので、３人終わったところで休憩を入れさせていただきます。

それでは、学長がおいでくださっていますので、最初に一言ごあいさつをお願いしたいと思います。

北川薫学長：

今日のお話は、私自身も大変楽しみにしております。それは二つの点です。一つは「教養とは何か」です。年を取れば取るほど自分の教養のなさにいつもつらい思いをしておりますが、教養というのは何だろうかと考えてみると、あくまで私自身の主観ですが、自分の専門をはぐくむベースだろうと思います。特に私は体育学部で自然系の生理学をやっておりますが、体育学部というのは人文系、社会系、自然系が全部混ざっております。ある

意味ではかつての教養部と似たような雰囲気がございます。そういう中で、いろいろな先生のお話をうかがうと、歴史がおもしろかったり、スポーツ・マネジメントがおもしろかったりして、実は私自身の教養がはぐくまれると思っております。

そういう意味で教養というのは、私は専門と切っても切り離せない分野だと思っております。もちろん人間性をはぐくむという点でも非常に重要だろうと思っております。それだけに、私自身は国際教養学部の先生には大変期待をしております。

それから二つ目は、ではその教養に「国際」という冠が付いたらどうなるだろうかということです。これにはなかなか答えは出ませんが、私がこれまで学生やゼミ生、特に若い世代に言っていることは、ともかく日本は地の果てであり、まさにファー・イーストだ。アジア大陸の果てからこぼれ落ちそうなところにあるという前提に立ってものを考えたいということです。食べ物とかいろいろな生活様式を考えると、例えば西洋文明がこちらだとすれば、反対の極にあるのではないかと思うのです。食べ物を見ても、すぐお隣の中国と日本では随分食べ物が違う、料理の仕方も違います。

そういうことで、日本の常識は非常識だと思ったほうがいいと思われます。いろいろな生活様式や考え方もそうだと思うのです。そういうふうに学生には言っております。

また、私は20年ほど前、タイのバンコクの文部省に半年おりました。そこで、つくづく「バンコクというのはまさに交差点だなあ」と思いました。そう思っていたところ、ドイツに長くいた体育学部のある先生から、日本ではテレビ番組で何か賞品が当たると、ハワイ旅行1週間というのが多いのですが、ドイツでは、アジア旅行というとだいたいバンコクで、日本や中国は全然アジアの中にも入っていないという話を聞きましたが、たぶんそうだろうなあと思います。

ですから、国際教養ということを考えると、日本はとかく外国からの文明を取り入れるという方向で来たのですが、今後日本人が新たに出ていく際、こういった世界の常識、日本とは違う常識、あるいは思考形態を持たないとたぶんやっていけないだろうということで、今日のお話を私自身も大変期待しておうかがいしたいと思っています。

さらに三つ目というのもなんですが、国際教養学部の先生におかれましては、どういう意味合いの学部としてのコンセンサスを構築していくかといったことは大変難しいかと思いますが、先に申し上げましたことを含めて構築していかれるよう期待申し上げております。これをもって私のあいさつに代えさせていただきます。

安村（司会、国際教養学部）：

ありがとうございました。

それでは、早速お話をうかがいたいと思います。

最初は国際英語学部のダンジェロ先生にお話しいただきます。ダンジェロ先生はアメリカのご出身です。最後にお話しいただくクラーク先生もアメリカのご出身ですが、アメリカは広いため、東の方と西の方に分けて、その間にフランスのペロンセル先生、ドイツのイミック先生、ロシアのペトリシェヴァ先生をはさませていただきます。そして、質疑応答のときに、少しスペインのバレラ先生にも加わっていただくことになっております。

それでは、ダンジェロ先生、お願いします。

ダンジェロ（国際英語学部）：

学長先生、伊藤学部長先生、安村先生、今日はありがとうございます。

今日は、私はこのちょっとカラフルな資料を使います。日曜日の夜、セブ島の International Association for World Englishes(IAWE) の学会から帰ってきたのですが、行く前に普通の紙にこのようなポイントを入れました。

やはり、国際英語はネイティブスピーカーとは反対の分野になります。ですから、最初、2002 年に境賛三先生がこういう学部を作ろうと思って、私は国際英語の International English より World Englishes 、複数形の‘-es’は大事なポイントです。世界中の自分のバラエティー、英語の変種が目的です。英語が公用語の国、昔植民地だった国、インド、フィリピン、アフリカ、シンガポールなどがありますが、カチュル先生やラリー・スミス先生などいろいろな学者の論文を読むと、やはりネイティブスピーカーは絶滅すると。しかし、日本はまだネイティブスピーカーを特別扱いしています。文科省の JET プログラム等は給料も結構いいのです。でも、論文を読んだら、世界で英語を使っているのは、ネイティブよりもほかの国のほうが多いのです。ですから、国際英語がよく分かったら、私は働けますし、辞めなくてもいい。やはりこういうパネルディスカッションでネイティブスピーカーから聞こうというのは国際英語とちょっと違うと思います。例えば、中国人の張先生も入れようと思っているのにちょっと残念です。やはり国際英語の場合、標準は、・・・外から入ることではなくて、中で自分の国、自分の文化、自分の context に合う教育をすることです。でも、もちろんこういう場合、いろいろな国のやり方を相談して、日本のいいところを改善できると思います。今日はそのいい機会だと思います。

私の学歴ですが、一番上の「Hopkins」は私立高校ですけれども、イミック先生などの出身国ヨーロッパは千年以上の歴史があるけれども、アメリカの場合の 1660 年は結構古いです。この学校は東海岸のニューヨークの近くのコネチカット州のニューヘイブン市にあって、Yale 大学の町ですが、私は SAT や高校の成績が足りなかったので Yale を受験しませんでした。

次のブルーの神父さんの帽子のマークは、コネチカットの州都のハートフォードという町のトリニティ大学です。トリニティ大学は 4 年制で、生徒が 1,800 人ぐらいのアメリカの典型的な small liberal arts college で、キャンパスは結構大きいです。大学院はあまりなくて、中心は四大です。

次はボストン大学で、私はジョン・ハンコックという保険会社で働きながら、夜間で MBA を取りました。1980 年代は日本ブームでしたから、みんな日本の経営を勉強していました。どうやって日本はそんなに上がってこられたのかと。私と同じ保険会社の人がボストン大学で MBA を勉強して、2 週間の旅行で operations management の先生と韓国と香港と日本へ行って、結構魅力的だと思ったそうです。私も申し込んで、日本に行ったときは、サンヨー電気とボストン大学が提携した 7 週間のプログラムがありました。日本に来て、日本の会社で働きたいけれども、やはりもっと日本語が上手にならないとあまり役に立たないので、アメリカに戻りました。でも、私は南山大学で半年日本語を勉強して、そのとき外国人の先生を見て、これは普通の企業よりいい生活ができると思いました。

マサチューセッツ大学の応用言語学のプログラムが始まったとき、学部長が「我々は中京大学と提携していて毎年１人送っています。次はあなたを中京大学に送ろうと思います」と私に言いました。結構嬉しかったです。

最後に、博士課程が始まったばかりのころのお話しします。

私はデリー大学で博士課程を勉強したかった。やはり、インドはInternational Association for World Englishesの場合でも一番大事です。でも、タイミングが合わなかったのです。

私の先生はいま韓国に行っています。この学会の前の学会長が南アフリカの大学で教授をしているので決まったのです。

資料の3. ですが、リベラル・アーツを考えたら、日本の大学の印象はやはり科目が多いです。国際英語は結構１単位の科目が多いですから、学生は毎学期14～15科目取っています。１週間に１回、90分では時間が足りない。休みや祝日を入れて、たまに２～３週間学生の顔を見ないことがあります。トリニティ大学は１週間に２～３回で、３回だと各50分、２回だと各75分です。ですから、日本では深い勉強があまりできない。アメリカでは４～５科目しか取らないので、本もたくさん必要です。書店へ行って、ある科目は７冊ぐらい買わなければなりません。そして、宿題がたくさんあります。それが一番の違いだと思います。トリニティ大学は4 or 5 classes per semester、１年に９科目、卒業までに36科目しか取らなくていいのです。私は、economicsのmajorは11科目だけで、major以外の科目は４分の３ぐらいでした。結構それがいいところです。やはり必修科目が少なくて、economicsの中に、Economics 101とMicroとMacro Economicsはありましたが、それ以外のクラスなどの哲学は自由に選択できました。

3b. のアルバイトやサークルよりも、私の両親が信じていたことは、違う州や、少し遠いところへ行って、学生寮に泊まることで人間はもっと成長するものだということです。実家に住んで地下鉄で通っていると、あまり大変な経験がないので、最近日本人も引きこもりなどがあるけれども、学生寮に泊まったら結構成長できると思います。

4. ですが、最近の日本の大学の印象は、人文とか教養科目の停止傾向です。日本の大学は、実用的な科目を重視しすぎていると思います。キャリアセンターや理事会、両親たちは、「お金をたくさん払っている私の子どもはどういう仕事ができるのか」と心配しています。最近入試センターでは、勉強することより卒業してから何ができるかということをパンフレットなどに載せていますが、何となくリベラル・アーツの意味は、専門学校ではないから深い勉強をしたいと。例えば、我々は最近ビジネスの科目をたくさん入れていて、日経新聞を引退した人などが先生です。けれども、基本的な経済学や経営学の科目が入っていないのです。でも、英語で勉強するのは大変です。経営学部では最近、少し英語を入れたいと言っています。でも、国際英語学部は、英語は上手ですが経営学はあまり深く分からない。今、私が考えているのは、１年生のときに必修科目の経済学を日本語で勉強し、そのベースがあったら英語の単語が分かるということです。

5. のポイントですが、私は偏差値制度を少し心配しています。偏差値は１回のテストで数人のAレベル学生の結果を重視する。よってBレベルの良い学生を入学させる事ができ

ない。そして後期の入試でCクラス学生に入学してもらう結果になる。その上、指定校も多い。平均的に良い学生をたくさん入学させたいと思います。

アメリカでは入試がなくSATというセンターテストを受けます。よって大学の教授はテスト作成に時間を費やす事はありません。日本の場合は逆で、テスト作成・校正・採点にたくさんの時間を費やします。その上、学内行政の仕事が多くカリキュラムの向上や、研究する時間が不足しています。

5b. 今まで日本ではあまり博士がいませんでした。でも、この10年、20年、だんだんみんな博士を取っています。セブ島での学会の帰りの飛行機で隣の席にフィリピン人がいたのですが、彼は外科医で、とても英語が上手でした。彼は医者の国際会議に行っていて、今まで日本人は発表するとき、読むのは上手だけれども、質問のときはあまり答えられなかった。しかし、彼に言わせると、この5～10年ぐらい結構上達したということです。それは良いことだと思います。やはり教員の学術的な水準を上げることは難しいです。もちろん我々の学部の水準も上げたいと思います。

6. ですが、アメリカ人の見方は、ディスカッションをやりたい。アメリカでは、大きい講義の授業で100人いても、先生が話をしているときに学生が手を挙げると、先生は止まって質問を受け付けます。しかし、日本の授業ではあまりやらない。それは日本のlearning style、日本の文化ですから、我々からそういうことを勧めるのは難しいです。もう少しディスカッションするように私は15年頑張っていますが、あまりディスカッションできていません。

7. は、立命館アジア太平洋大学（APU）や早稲田大学についてです。APUは九州の別府にありますけれども、学生の50%以上が外国人で、アジアの学生がたくさんいます。今、ヨーロッパへ行くと、オランダや、ドイツ、スウェーデンやフィンランド、やはりISEP(International Student Exchange Program)の場合、フィンランドやフランスが多いです。うちの学科からも1人がフランスへ行きました。でも、授業は全て英語で受けています。ヨーロッパの中の全てではありませんが、英語で勉強する専攻は少なくとも1つはあります。我々も同じ制度を作りたいです。国際英語を考えたら、やはりバイリンガルが大事なことだと思います。津田幸男先生は日本語が無くなる、国語が無くなる、英語が混ざるなどと言っておられます。これはフィリップソン氏が書いた本ですが、カチュル先生やEnglishesの先生たちは、やはりバイリンガルになって、母国語と両方使っていると言っておられます。例えば大学を卒業したシンガポール人は、中国語も完璧ではないし、英語も完璧ではないけれども、必要なところは覚えて英語を使います。自分の頭の中に二人のネイティブを持つのは無理で、その必要はありません。バイリンガリズムの考え方は、やはり国際英語の先生がよくご存知で、例えば、シカゴ大学のムフエネー(Mufwene)先生はコンゴ出身のアフリカ人ですが、彼はシンガポールに行って、食堂で食べたい物を指さして注文しました。シンガポールの食堂で働いている人は英語ができません。ですから、英語が母国語を絶滅させる心配はありません。

8. の「真似より国際相談、日本的な改善」ですが、全て他国の真似をするのではなく、いろいろな国の人と相談し、日本に合う改善をするという事が一番大事だと思います。

ありがとうございました。

安村（司会、国際教養学部）：

ありがとうございました。

アメリカで勉強してこられた大学の雰囲気などを話していただきながら、今感じておられること、こうすればいいのではないかというお話をしていただきました。最後のところで、日本独自のものを参考にしつつ考えていかなければいけないのではないかというご提言をいただき、ありがとうございました。

*

*

*

*

*

*

安村（司会、国際教養学部）：

以上、三つお話しをうかがいまして、約１時間経ちましたので、休憩を取りたいと思います。45 分からまた始めたいと思います。

（休憩）

安村（司会、国際教養学部）：

それでは45分になりましたので、続きを始めたいと思います。

今度はロシア語のペトリシェヴァ・ニーナ先生です。ウクライナのハリコフ大学のご出身で、日本に留学され北海道大学大学院で学ばれました。では、お願いします。

ペトリシェヴァ（国際教養学部）：

ソ連が崩壊してから、ソ連生まれソ連育ちの人々は母語や母国という概念に関しては混乱しています。私はウクライナ国籍ですが、ロシアは私にとって外国だとは言えません。今日の話はウクライナ中心にしますが、大体のことはロシアにも当てはまります。そして、私は日本の大学でTA以外の立場で働いた経験はまだ1年半に過ぎませんから、ちょっと話の題名を変えます。「教養教育への提言をふまえた、母国の教養教育について」話をしたいと思います。というのは、ウクライナでの教育を中心に、お話をしたいと思います。

お手元にあるハンドアウトに書いてある通り、日本とウクライナの高等教育制度は結構違います。ソ連の時には大学における教育は5年間でした。今はそれが変わっていて、二つの制度があります。一つは世界と同じく、4年間の学士と、あと2年間の修士です。もう一つは5年間で「専門家」学位をもらって、希望があれば、あと1年間で修士学位がもらえるという制度です。

学年は9月から始まって、秋学期と春学期からなっています。1日に3－4コマがあります。卒業年だけは卒論と国家試験がありますから、1日2コマ程度になります。単位習得に関してはレポートや筆記試験は非常に少ないです。とくに教養科目においては口頭試問の方が一般的です。その場合、講義の先生とゼミの先生が二人（あるいはどちらか一人）質問のカードを作ってテーブルに並べます。学生達は一人ずつ部屋に入って、カードを取って、そのカードに書いてある（普段学んできたトピックの2つか3つに関する）質問に答えます。これは口頭試問です。

口頭試問のいい点は、学生達の答えは偶然に当たることもありませんし、知識を深く調べることが出来るという点です。あまりよくない点は、どうしても個人的な意見が入ってしまいますので、成績はどこまで客観的かという疑問ですね。筆記試験とレポートは日本と変わりません。

一番大きな違いは、その学年で必要な単位をとらないと退学させられます。但し、再試験制度はもちろん、あります。試験期間が終わってから一ヶ月以内で再試験は可能です。それをも落としたら、退学です。再入学することなしに、退学した学年に戻るのは非常に難しいことです。

さらにいいますと、プレッシャをかけるのは強制軍務です。ウクライナでも、ロシアでも、18歳の男性はみんな必ず軍隊に2年から3年間は入らなければなりません。ただし、在学中の人と大学の卒業者はそれをしなくていいのです。そうしますと、軍隊に行きたくない男子学生はしかたなく真剣に頑張らざるをえない。強制軍務がいいことかどうか別にして、学生のやる気は日本と違って、とても高いです。私だけの意見ではなく、ロシアに留学した日本人の友達も「ロシアの方が勉強している」と言っています。

そして、学生の教員への態度や自分の勉強への責任感もウクライナと日本は違います。

ウクライナでは教員への敬意は日本より高いと思います。学生の話し方だけではなく、遅刻や無断欠席も教員を尊敬しない標識だと思われますので、日本より少ないです。簡単な例を申しあげますと、ウクライナでは学生が授業に15分も遅れるということはありません。日本では、10分遅れても、「すみません」さえ言わずに教室に入る学生もいますし、30分遅刻する人もいます。ロシアやウクライナでは15分遅れた学生は教室に入れません。先生によっては、５分の遅刻さえ欠席になることがあります。それは先生が偉そうな行動をするというのではなく、社会での前提知識は「勉強は学生の仕事だ」ということです。教師は遅刻せずきますし、ちゃんと授業の準備をしています。それは教員の仕事だからです。学生も自分の仕事には責任を持たなければなりません。宿題をちゃんとしたり、時間通りに授業に来たりするのは勉強という彼らの“仕事”への責任を表していると思われます。

大学のカリキュラムに移りますと、さらに大きい違いが目立ちます。ロシアにも、ウクライナにも選択科目はありません。全ての科目は必修です。専門はもちろん、教養の授業もです。本学でいう全学共通科目も選択ができません。それぞれの学部は専門的な科目や教養科目を決めて、それを５年間の学習期間に配分します。

多くの教養科目は大学や学部に関係なく学ばなければなりません。形式は日本と同じく、講義もゼミもあります。日本と違うのは国語の扱いです。ウクライナではどんな学部であっても、ウクライナ語の授業は卒業まで続いていますし、国家試験の一つにもなっています。国家試験は普通３つぐらいありまして、その中の一つは必ずウクライナ語です。もう一つの国家試験はウクライナの歴史です。

もう一つ専門に関係なく取らなければならない科目は外国語です。ただし、第２外国語はありません。高校で勉強した外国語しか選べません。大学で外国語を学べる期間は２年です。新しい言語を勉強できるのは大学のクラブみたいなところしかありません。教員がボランティアでアルファベットから教えてくれるのであれば、その外国語の勉強ができます。単位はもちろんもらえません。つまり、外国語学部以外、大学での外国語は高校で学んだ外国語です。

次は歴史、経済、哲学です。この科目について１分だけ話したいと思います。

この三つの科目を教えている教員は、ウクライナでも、ロシアでもものすごく困っています。皆様お分かりの通り、ソ連時代の経済、歴史、哲学はとても偏ったものでした。今、大学の教師は若くても私と同じぐらい30代の人たちでしょう。すなわち、ソ連時代教育を受けた人です。彼らは自分の専門的な勉強をし直しながら、その科目を教えています。

そして、体育の方々には最後になり大変申し訳ありません。体育教育ももちろんあります。皆さん、資料の方に「体育教育もあります」と書いて下さい。どんな学部であっても、どんな大学であっても、体育教育は２年間必ずあります。体育というのは体の調子に係るものです。例えば、病気でどうしても普通に健康な学生と一緒に授業ができない人もいます。彼らは同じ時間帯で特別なリハビリみたいな体操や軽い運動をしますが、体育の授業に出ない学生はいません。病気だったら、どうぞゆっくり歩いて下さい、軽く何とかしてくださいといった調子です。体育の授業を受けなくていい学生はいません。

今まで私が話してきました科目と異なり、大学と学部によって違う教養科目もあります。

例えば、文学部だったら世界文学、国文学です。法学部だったら、修辞法とか政治学とかです。しかし、そのような選択も学生によるものではなく、学部の選択です。教養科目としてカリキュラムに入る可能性のある授業は社会学・心理学・世界や国文学・政治学・憲法などです。そのうち文学だけは１年間続き、文学以外は、一学期です。

日本と旧ソ連の高等教育の違いがこれだけ大きい中で、私が日本の教養教育へ提言として言えることは、二つしかありません。一つは私達教員自身によることです。大学生が自分の勉強に対してもっている意識、責任感を高めた方がいいと思っています。私がいつも授業で言いますのは、大学生にとっては勉強が彼らの仕事だということです。その仕事に対して責任感をもたないのはおかしいと思うわけです。

もう一つのことは、私達の学部だけ、中京大学だけで解決できないことかもしれません。ただし、少なくとも、意識していた方がいいと思うことは国語教育への態度というか、国語教育の扱い方ということです。カリキュラム科目として日本語は必修ではないことに私は、大変びっくりしました。学生達は私が習った日本語と違う言葉を喋っています。例えば、私が一回「喋られない」と言ったことがあります。ある学生には「先生、‘喋られない’って、おかしいですよ。‘喋れない’の方が正しいです。」と言われました。まぁ、それはいいとして、もうちょっと国語学習を重視した方がいいと思います。もちろん、学部だけではどこまで変化させることができるか分かりません。ただし、私達が意識しなければ、何らかの動きを始めなければ、何も変わりません。

それにつながるのは、イミック先生がおっしゃった外国語教室での日本語です。私達は習っている言語の国に住んでいるわけではありません。相手も子供達ではなく、大人ですよね。外国の環境ではないのですから、教室で母語を使わないのは問題だと思います。

私の後にクラーク先生の話もあります。長くお聞きいただき感謝します。最後に１分だけロシアのジョークをご紹介しましょう。教授と学生についてのジョークです。

経験豊かな教授と若い講師が口頭試問の担当をしています。ある学生が教室に入って、カードを選んで、質問を見ると「先生、ちょっと、選び直してもいいですか」と尋ねました。本当はダメだけど、教授は「いいよ」と答えました。学生は喜んでもう一枚を取って、質問を見て、「もう一回選び直したい」と言いました。教授は「いいえ、君の成績をＣとしますので、次の人を呼んで」と答えました。学生が出た瞬間に若い講師はびっくりしながら「何も言わなかったのに、何でＣになったのですか？」と教授に聞きました。教授は「探しているというのは、何かを知っているからだ」と。私も学生達にも少なくとも「探す」ということをしてもらえるように祈っています。

ご静聴ありがとうございました。

安村（司会、国際教養学部）：

ありがとうございました。

それでは、次はアメリカの西海岸のサンディエゴ州立大学ご出身のクラーク先生です。日本では愛知教育大学大学院で学ばれました。

クラーク：

はい、クラークと申します。よろしくお願いします。

配布資料もありますので、時間があれば最後にちょっと英語でいきたいと思います。

30年以上前になりますが、私はサンディエゴ州立大学、英語ではSan Diego State University（SDSU）の文学部を卒業しました。そのときSDSUは、カリフォルニア州立大学公立高等教育学校のキャンパスの一つでした。ですから、SDSUは百年以上の歴史があり、カリフォルニア州立大学群のなかで３番目に古い大学です。

もちろんサンディエゴはアメリカの50州の一つではなくて、市になります。州立大学と言うのでどうしても「サンディエゴ『州』というのがありますか」とよく聞かれますが、もちろんサンディエゴは町の名前です。カリフォルニア州立という大学のシステムの中で、サンディエゴにあるということです。

私の父も第二次世界大戦の前に同じ大学に入学しました。残念ながら、戦争のために中退しましたが。

私が在学していた70年代には、既に学生数は25,000人というかなり大きな大学になっていました。1977年、私は5,000人の学生と共に卒業しました。その卒業式で、とても記憶に残っていることをお話しします。

その年は、会場のフットボールスタジアムに私達文学部の学生が最後に入場しました。会場に入ると座る椅子が足りません。私達はスタジアムの端に立ちながら、100ヤードも離れたもう一方の端から聞こえてくるスピーチを聞かなければなりませんでした。私はスピーチを聴くのを止めてキャップとガウンを着けたままで会場を歩き回り、３～４万人もの参列者の中から自分の親を探して見つけました。

現在、35,000人以上の学生がいます。そして、大勢の学生が毎年卒業します。卒業式に座れる椅子は十分にあるのだろうかと私は今でも心配しています。

70年代は、カリフォルニアに住んでいる人は授業料が無料でした。登録費と学生団体（ユニオン）費は、だいたい年間500ドルだけでした。

教科書代はそれ以上でしたが、高等教育に掛かる負担を減らすため、中古の教科書がブックストアに置いてありました。それでも、その当時は「大学教育にお金が掛かりすぎる」と不満を言っていたものです。

現在でも、やはりカリフォルニアの住民は授業料が免除されます。フルタイムの学生では、だいたい年間4,000ドル必要です。ブックストアでは以前と同じように、セールで中古の教科書などが販売されたりしているでしょうし、学生はやはり以前と同じように、カリフォルニアの高い教育費に不満を持っているに違いないでしょう。

ここで、学生の授業の登録について説明します。

登録の申し込みは、授業が始まる１～２週間前にキャンパスで３・４年生から行われます。このため１・２年生にとっては、人気のある授業の席がなくなってしまいますから不満も出ます。学生は、学期が始まってから10日以内であれば、授業を取り消すことが可能です。また、15日以内に授業の追加もできます。

登録の際に学生は、専攻ではない授業の評価方法についてA・B・C・D・E・F評価か、

あるいは可・不可のみの評価のどちらがよいのか、本人が決めることができます。フルタイム学生の授業は１学期につき 12 ユニットあります。１ユニットは 50 分の授業に相当します。ほとんどの授業は３ユニットですが、外国語は４ユニットで、数学は５ユニットです。これは、１週間に外国語は４回、数学は５回の講義があるということです。

３ユニットの授業の場合、学生は１週間に 50 分の授業を３回受けて、１学期にトータルで 42 クラス受けます。

SDSU は１年間に 14 週の２つの学期と、それぞれに１週間の試験期間があります。多くの授業で、学期の７週目に中間試験、あるいは、レポート提出があったのを覚えています。

教員は、５～ 10 日までに成績を提出しなければなりません。

教師は授業をほとんど休講しません。私が覚えている限り、補講もありませんでした。上級生になると、教師が時々自宅に招待してくれました。とても気に入っていたことは、プール付きのガーデンがある大きなお宅に招待されたことです。それと、日本語の先生がすき焼きパーティーを開いてくれたことです。

スピーチの最後に、SDSU での教養教育は、私の人生において非常に大切なものです。卒業当時は、私の専攻科目に適した職業がなく、どうしたらいいものかと困っていました。そんなとき、私の日本語の先生が岐阜大学の先生に連絡を取り、私が日本で英語教育の研究ができるような関係を作ってくれました。

30 年以上前に、立ったまま臨んだ卒業式から１か月後、私は日本にいました。そして、それ以来、母国には休暇に帰るだけで、ずっとこうして日本にいるわけです。

もう少し時間がありますので、配布資料を少し見てみたいと思います。

私の大学の学部卒業資格と、裏のページでは教養教育、General Education のメインポイントが書いてありますので、ちょっとだけ説明したいと思います。簡単な English でいきます。

The first part is some basic information about my university. It's a part of the CSU system. They are free systems, the UC systems. It's very famous, the UCLA, UCSF, UCSD system, and it has medical and engineering departments. It's hard to enter those universities, more expensive, too.

The second system is my university system, California State University. A lot of students are graduating every year. In fact, 1 in 7 San Diegans have graduated from SDSU.

Fifteen percent of the adult population of San Diego went to SDSU. It's very popular to go to because it's so cheap.

Now, the population is over 36,000, with 200,000 alumni. Like I mentioned in my speech, there are two 14-week semesters, the same as CHUKYO, and we have two one-week examination periods. The difference, as I stated in my speech, is we have a midterm test. Which I think, it's a very good point. Halfway through the semester, we have to take a test. It keeps the students studying.

For Undergraduate Admission Requirements, we have to study in high school, we

need four years of preparatory English, and two years preparatory mathematics.

Then, if the grade point average is above 3.1, we don't have to take an entrance exam for the CSU system. (SDSU は、入学試験なしで入学 OK です。)

If your score is lower, you need to take the SAT or ACT. The SAT (Scholastic Aptitude Test) is so popular. ACT isn't used too much.

So again, depending on your grade point average (GPA) and your SAT score, you can qualify now.

For Graduation Requirements for a Bachelor's Degree, we have English Placement. We have to pass it before graduating. And, also Writing Competency and Upper Division Writing requirements. (Upper Division は３・４年生の授業です。)

Mathematics, all students have to take an Entry-Level Examination, and Competency Requirement to graduate.

次の教養教育のほうが大切かもしれません。

For General Education Requirements, a minimum of 49 semester units, approximately one-third of all college studies. (この三つのカテゴリーに分かれています。) (1) Communication and Analytical Reasoning, (2) Foundations, and (3) Explorations. (このカテゴリーは、それぞれ裏のページにもう少しコンパクトに書いてあります。)
(これは教養教育の別の必要条件です。) Foreign Language Requirement : Completing three semesters of one foreign language, excluding conversation courses. (会話の科目は関係ない。三つの講義科目です。私は、Japanese Language 101 と 102 の１年生の講義と、201 の２年生の講義を受けました。それは３期あります。)

Next are Total Units and Other Requirements. (卒業するために 124 単位必要です。) A total of 124 units-40 in upper-division.

Also, we need to have three averages of 2.0 or higher, the highest point is four, the lowest is one. 2.0 or higher for(1) average. of all courses taken at SDSU, (2) average. of all courses taken at SDSU and transferred courses from other universities, and (3) average. of all upper-division major courses. (この三つの筆記の成績をとらないと卒業できません。)

では、裏のページです。

I think this is a little more important for a discussion today, Breakdown of General Education Requirements, 49 of 124 units.
(1) Communication and Analytical Reasoning, (2) Foundations, and (3) Explorations. So, we can't take just one area, we have to take a grouping of a lot of categories. We can only take a minimum of 12 units from each division. So we have to take a little bit of everything plus a foreign language.

The next section is Explanation of units that I talked about in my speech.

And the last section is SDSU General Education Objectives : (1) To develop in students the intellectual capabilities necessary to the enterprise of learning; (2) to introduce

students to the modes of thought characteristic of diverse academic disciplines; (3) to help them understand the conditions and forces which shape them as human beings and influence their lives;and (4) to help them apply critical and informed judgments to the achievements of their own and other cultures.

Thank you.

最後は英語で話をいたしまして、すみませんでした。Thank you。以上です。

安村（司会、国際教養学部）：

ありがとうございました。サンディエゴ州立大学のカリキュラム等について詳しくお話いただきました。また、最後には、General Education の理想についても触れていただきました。

以上アメリカからお二人、それから、フランス・ドイツ・ロシアからお一人ずつお話をいただきました。

この後少し皆様方の間でお尋ねになりたいことがあるかと思いますので、出していただき、スピーカーにそれらの質問に答えていく時間を少し持ちたいと思いますが、その前に、このところお忙しいということで正式なスピーチは控えるけれども少しならお話しできるということで来てくださっていますスペインのセビリャ大学で学ばれたバレラ先生に、スペインのことについて少しお話いただきます。

バレラ（国際教養学部）：

よろしくお願いします。

実はあまり準備ができなかったのですが、私の経験を端的に話しますと、私はセビリャ大学のスペイン語言語文学部で勉強しました。本来の名前は filologia といって、英語で言っても通じにくいのですが、それについてお話しします。英語でいうフィロロジーというのは、教養学部とはちょっと違うのですけれど、言語と文学と歴史などいろいろと混ぜて学ぶもので、向こうの大学では５年間かかります。

１年生と２年生では、さまざまな科目を勉強します。１年生では、言語ですと五つ勉強します。もちろん話せるところまではいきませんが、文法ぐらいを勉強します。アラビア語、ラテン語、古代ギリシャ語とかです。その後専門に入っていきます。スペイン語・言語文学部と言いましたが、スペインだけでなくもちろんラテンアメリカの文学もあります。

この間、両親が一番心配したのは、卒業したら何ができるかということでした。日本の学生も将来のことを心配していますが、私たちは仕事は絶対に無いということはみんな知っていました。それでも私はフィロロジーを選びました。その点は日本と全然違うところでしょうか。スペインでは、どんな有名な大学を卒業しても、勉強と関係のある仕事に就くのはなかなか難しいのが実態です。

私の大学はとても有名で、すごく厳しかったです。厳しいというのは、入った学部で 20% しか卒業できないということです。もちろんすごくいい先生もいまして、先生は神様ぐらい尊敬されていました。

それで、私は１年生に入って一番印象に残っているのは、先生からの言葉でした。”大体 20% しか卒業できないし、残りはごみのようになってしまう（笑い）”ということです。

その当時のことを思いますと日本の大学はもちろんぜんぜん違いますし、今のスペインの大学院でもぜんぜん違うと思います。それほど厳しかったです。私はセビリャ大学を卒業して、途中でISEP PROGRAMで日本に1年間お邪魔いたしました。東京外国語大学で一年間勉強しましたが、サークルなど大学のすごく楽しい面も経験しました。そういうことはスペインにはないことでした。

大学院はマドリード大学で勉強しました。マドリードで3年間学びました。それで、ヨーロッパ流のDEAというdiplomaを得ました。

いま一番言いたいことは、そのISEP PROGRAMのときにびっくりしたことです。ある授業でのことです。授業は全部英語だったのですが、日本人の学生も参加していて、日本人の先生が質問をして日本人の学生に答えてくださいと言いました。その学生は何も答えずに2～3分経って、いきなり泣き始めました。私たちはみんなびっくりしました。なぜかというと、別に質問はそんなに難しくなかったし、たぶんヨーロッパなどでは、分からなくても答えるからです。それは「道を教えてください」と聞かれたときなども、その住所は分からないのだけれど、「まあ取りあえず真っすぐ行って」といった調子で答えるのですが、その学生は泣いてしまったのです。それは私には印象深いことでした。

その時感じたことは、日本では、自分の意見を出すのがそれほど簡単ではないのだなということでした。

次にフランスやイタリアと違って、スペインでは卒業論文は必要ありません。なぜかというと、筆記試験が論文の形で4時間から5時間かけて行われるからです。ただイエス・ノーを答えるだけではなく、そういう試験が多いのです。私の学部の言語文学も、5時間から6時間の試験が普通でした。そこは日本と違うところです。

ですから、自分の日本語の能力が非常に大切になってきます。そういう試験がないと、自分が日本語でどうやって表現するのか、そういう問題が生じると思います。ただ新しい言語の作文の仕方ではなく、自分の言葉で意見の発表や表現が求められるのです。

以上、少しスペインの大学と日本の大学で学んだ経験の一端をご紹介させていただきました。よろしいでしょうか。

安村（司会、国際教養学部）：

はい。ありがとうございます。

それでは、しばらく質疑応答の時間をもちたいと思います。今までお聞きになったことで何かご意見や質問がありましたら、お願いします。

質問者：

今日はいろいろ面白い話をありがとうございました。栂と申します。

今日のお話でちょっと思い出したのは、昔安村先生が部長だった頃に、今日イミック先生がお話になった自由7科のあたりの話をされたことでした。また、1年半前に今の伊藤学部長が学生たちに我々の学部がどういう学部であるかということを説かれたときに、ルネサンスあたりの学問の新しい起こりということを説かれたことも思い出しました。それらは、今日6人の先生方のご発表と一つの大きな流れとしてつながっているように感じた次第です。そのあたりのことを司会の先生に、補足していただけるとありがたいと思います。

安村（司会、国際教養学部）：

ありがとうございました。最後のまとめは学部長がしていただけると思いますので、私が皆さんのお話を通して思いましたことを一つだけ申します。皆さん共通して我々がもう少し大切にしなければいけないことをおっしゃっていたように思います。それは、母国語である日本語をもう少ししっかりとしなければいけないということ、自分が勉強をしたことだけではなく、それを用いて自分の考えを述べる力を伸ばさなければいけないということでした。それは非常に大切なことだと思いますし、リベラル・アーツの伝統にもつながることだと思います。そういうことにも関連してご質問とかご意見があったらどうぞお出し下さい。

ダンジェロ（国際英語学部）：

少し言い忘れたことがあります。

私はトリニティ大学に入り１年生の最後で専攻を選びました。これは日本の大学との大きな違いです。オーストラリアとイギリスも日本と同様、学部に申し込むようです。アメリカの場合いろいろな分野をサンプリングし、好きな専攻を選びます。２年生で専攻を変更する事も可能です。

安村（司会、国際教養学部）：

はい。大学で自分の専攻をどこで決めるかというお話ですね。最初から決めるのではなくて、入って１年ぐらい学んで決めていくというのが、アメリカのシステムだということですね。ありがとうございました。ほかに何か質問ございますか。

*

安村（司会、国際教養学部）：

今のお話しはおそらく、中世のリベラル・アーツの中での弁論とか、そういうことに関わることなのでしょうね。

質問：

*

ペトリシェヴァ（国際教養学部）：

そうですね。私は外国語を学んだのですが、大学では natural science がありませんでした。理系の人たちには必ずあります。でも、文学はありません。私が大学の文学部に入るときには、数学の試験さえありませんでした。

今は制度が変わっています。けれども、ソ連のときのパターンで入学した私は、高校でこれから専門に勉強したいことを決め、外国語でしたから国語、国文その他の外国語、そして歴史を頑張って勉強し、ソ連の入学試験を受けて入りました。しかし、大学では数学とか化学とか物理学は、まったく１回も先生の顔さえ見たことなく、５年間勉強しました。

しかし、現在は違います。現在は、ロシアでもウクライナでも、とにかく高校を卒業すると全ての科目の試験があります。その試験の結果に基づいて、大学に入学できます。もちろん数学とか科学とか物理学が必ず入っています。

ロシアは知りませんが、ウクライナで問題になっているのが、例えば高校を卒業して２年間軍隊に行ってから物理学を学びたい人が、２年間で英語をすっかり忘れたという場合です。そうすると、日本のように一般的な高校の卒業試験みたいなものに基づいてしか入学できないと、高校を離れたら大学への入学が難しくなるという問題があります。ですから、大学に入ってからの数学・文学系にはまだ触っていないようです。

安村（司会、国際教養学部）：

ありがとうございました。ほかにございませんか。

質問：

*

*

ペトリシェヴァ（国際教養学部）：

私は学生の時、特に分からなかったのは経済学でした。１年間、講義１時間半とゼミが２時間半、週に２回経済学がありました。しかも基礎練習的なもので、いったい何のためと思うばかりでした。大学生の時にはもうさっぱり分かりませんでした。哲学はなんとかなりましたが特に経済学が分からなくて困りました。でも、今では、そんな経済学さえ必要だったのではないかと思います。どういう点かというと、なんとか理解しようとする時、理解するための方法が結構勉強になりました。つまり、どこを見れば、何を探せば理解できるかという点です。というのは、一般教育の科目は数学にしても哲学にしてもその知識だけ与えるものだと私は今思います。知識だけ与えるのではなくて勉強の仕方も教えると思います。その点では今言いますと、より一般教育があったほうが専門よりもいいと思いますけれども、先生が最初に挙げたように専門家という人を作るためにもうちょっと専門の科目を集中したほうがいいのではないかと、自分が学生だった時には結構思っていました。経済学よりも英語がほしいと。

質問：

*

ペトリシェヴァ（国際教養学部）：

そうですね。ですからそれはイミック先生がおっしゃったとおり、何をどれぐらい専門に対して教えるのか。たぶん学部は選べるものだったら学部で選んだほうがいい。上から決められるものだったら上に提案したほうがいい。でも我々の学部にとっては言語を選んでいる子たちもいますけれども、何か社会学とかほかのリベラル・アーツのゼミを選んでいる子たちもいますので、「専門とは何か」とは「この学部において専門は」とは言えなさそうです。私の意見では。

*

ダンジェロ（国際英語学部）：

歴史の授業では、政治学、経済学、哲学、自然科学などの分野を学べるので教養教育にはとても良いと思います。ですから歴史を勉強したらガリレオやケネディとか、どうやって地球が太陽を回しているか、やはり歴史は全部が学べるのです。学生に国際教養教育を学ばせたらいろいろなコネクションや、分析ができる、専門学校の生徒がコンピュータだけ勉強して幅広い分析ができないので深く考える力を訓練したり国際教養教育をするのが一番大事だと思います。

私は２～３年前からゼミで歴史を教えていますが、殆どが戦争についてなので、女子学生の８割はあまり興味がなく、ゼミの人気も落ちてきました。今年からはある国(X)での生活状況や、現在の話など毎週違う国を学び15分野の表を作って、政治から地理はAさん・政治学はBさん・経済はCさんと分けローテーションで発表する。

*

ダンジェロ（国際英語学部）：

The other language is English.

*

ダンジェロ（国際英語学部）：

どなたかが、多言語（multilingual）の話をされましたね。やはり二言語話者（bilingual）より多言語話者の方が良いと。

安村（司会、国際教養学部）：

そのほうがいいですね、当然。

ダンジェロ（国際英語学部）：

今ヨーロッパでイギリスの Jennifer Jenkins 先生とウィーン大学の Barbara Seidlhofer 先生が VOICE コーパス（Vienna-Oxford International Corpus of English）を作りました。今までのアイス（ICE：International Corpus of English）、いろいろな応用学を使用しているアイス・シンガポール、アイス・フィリピン、アイス・グレートブリテン、アイス・インディア、アイス・イーストアフリカの全部が一つの国のコーパスです。

しかし、ヨーロッパで Jenkins と Seidlhofer 先生が『English As a Lingua Franca』という全てヨーロッパ英語のコーパスを作成しました。

*

クラーク：

でも、やはり文学を考えたら・・・「Sapir-Whorf 仮説」

ダンジェロ（国際英語学部）：

World Englishes の考えは、英語とネイティブスピーカーの文化は離れている。日本人は、英語を勉強したら、アメリカかイギリスの文化も勉強しなければならないと思っている。逆にインド英語を話す人はアメリカの文化を勉強しない。

*

ペトリシェヴァ（国際教養学部）：

それは母国語でないと、たぶんロシア語では不可能だと思います。４年生になっても strategy を、ロシア語を専門にしている唯一の４人の小さいグループではたぶん英語ができるけれども、strategy とかはロシア語では教えられません。そのために教養の科目が必要ですし、そのために日本語の授業も必要だと思います。

安村（司会、国際教養学部）：

時間が足りなくなってきました。盛り上がっていますが。

大事なことは、さっきおっしゃったように、カリキュラムを考える時にはそういう議論が必要になるだろうと思います。

さて、国際教養学部も完成年度が段々近づいてきますと、カリキュラムなどいろいろ考えなければいけないと思います。本日はそのための材料と言ったら変ですけれども、そういうかたちでお話をうかがえたと思います。それでは最後は学部長にしめくくっていただいて終わりにします。

伊藤進国際教養学部長：

本日はお話しくださいました先生方にまずもってお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。経験交流会は今回で 10 回目を迎えました。今回は今までの企画と違いま

して、初めてだと思いますけれども、ネイティブの先生方にお話をしていただくということにたしました。

なぜ今ネイティブの先生方に西洋、ヨーロッパにおける教養教育について語っていただいたのかということなのですけれども、私なりに考えているのは次のようなことです。栂先生へのお答えになるかどうかは分かりませんけれども、私としましてはこのように考えています。ご存知のように、教養というものは、元々は精神の部屋というか、精神を耕すというふうに、精神活動を意味していただけではなくて、文字通り土地を耕すという意味があったわけです。それが前者の意味に収れんしていったのがルネサンスのころで、ローマで活動をしたのが、ペロンセル先生からも名前が出ましたけれども、キケロの再発見だったと言われています。キケロは、どんなに肥沃な土地でも耕されなければ豊かな実りを結ぶことがないように、私たちの魂も学ばなければ豊かになることはないと申しました。キケロはフマニタス（humanitas）と言っていますけれども、教養こそが人間を真の人間たるものにするのだというようなことを言っています。つまり、このローマの哲学者によれば、教養は一つの知的営利を表していて、教養を土台としてそこから専門的な知識にまで発展しうるということです。従って「教養教育か、専門教育か」という、これかあれかという次元の問題ではなくて、その中心にあるものこそが、全人的教養というふうに訳されますけれども、フマニタスであると言えます。こういう考え方がヨーロッパ西欧の伝統として吸収されてきているわけです。

ひるがえって私たちの国ではどうかと考えてみますと、1991年の大学審議会の答申で、専門教育化がどんどん進められていってしまいまして、皆さんもご承知のように教養教育が軽視されるという風潮が顕著になってきているわけです。安藤先生もおっしゃっいましたように、最近また教養復権ということが言われてはいますけれども、それでもまだやはり私たちからすれば教養は軽視されているように思われます。そういうことからも、脈々とヨーロッパで受け継がれているこの教養、あるいは教養教育というものの一端を、ネイティブの先生から教えていただいたことにより、教養教育の軽視、教養教育の弱体化を目の当たりにしている私たちにとって、ヨーロッパに学ぶものがあるのではないかという思いを強くした次第です。

本日出席してくださった先生方、特にこの経験交流会の立案・実施の労をとっていただいた委員の先生方に心からお礼を申し上げまして、ご挨拶にかえさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

安村（司会、国際教養学部）：

ありがとうございました。次の機会には中国や韓国など、アジアについてもまた教えていただければと思います。